

Digest of Science of Labour

労働の科学



2 0 2 1
January
Vol. 76, No. 1



特集

『労働の科学』アーカイブを読む

労研デジタルアーカイブで『労働の科学』を公開! / 北島洋樹

暉峻義等「労働組合運動と労働科学」解題・毛利一平

桐原葆見「産業精神衛生の諸問題—不応現象から比較文化研究まで」解題・鈴木一弥

齊藤 一「停年制をめぐる諸問題と中高年者の労働能力の活用」解題・川上 剛

三浦豊彦「通説衛生史 (その1) —若き日の鴎外先生と衛生学」解題・山野優子

多田 治「評価のための測定法2 / 有害物」解題・原 邦夫

大島正光「労働と年齢」解題・松田文子

巻頭言

時代を拓く新たな一歩を
和久井康明

労働科学研究所の役割と未来
——創立100周年に当たって
濱野 潤

連載

今、チェルノブイリは①
千葉百子

労働の科学

2021
January
Vol.78, No.1

巻頭言

俯瞰（ふかん）

創立百年——これからの労研の役割とあり方①

時代を拓く新たな一步を

和久井 康明 [株式会社クラレ 顧問]

1

表紙作品：山本美智代
「黄色いバックのコンポジション」
紙のコラージュ（29×50cm）
表紙デザイン：大西文子



『労働の科学』アーカイブを読む

労研デジタルアーカイブで『労働の科学』を公開！

..... [大原記念労働科学研究所] 北島 洋樹 4

暉峻 義等「労働組合運動と労働科学」 6

『労働と科学』1巻1号，1946年

..... 解題 [ひらの亀戸ひまわり診療所] 毛利 一平 9

桐原 葆見「産業精神衛生の諸問題——不適応現象（maladjustment）から
比較文化研究（cross-cultural study）まで」 10

『労働の科学』15巻6号，1960年

..... 解題 [労働安全衛生総合研究所] 鈴木 一弥 17

齊藤 一「停年制をめぐる諸問題と中高年者の労働能力の活用」 18

『労働の科学』20巻1号，1965年

..... 解題 [労働安全衛生・労働監督上級専門家] 川上 剛 22

三浦 豊彦「通説衛生史（その1）——若き日の鷗外先生と衛生学」 23

『労働の科学』7巻9号，1952年

..... 解題 [昭和大学保健医療学部・医学部] 山野 優子 27

多田 治「評価のための測定法2／有害物」 28

『労働の科学』20巻2号，1965年

..... 解題 [産業医科大学産業保健学部] 原 邦夫 32

大島 正光「労働と年齢」 33

『労働の科学』29巻5号，1974年

..... 解題 [大原記念労働科学研究所] 松田 文子 37

Graphic

広がる参加型職場環境改善 Ⅰ [見る・活動](120)

..... 長須 美和子 口絵

Series

凡夫の安全衛生記 (48)

「大根役者の名演技」ビデオ教材を作る 福成 雄三 44

労研アーカイブを読む (64)

先進安全自動車と眠気予測項目

自動車の安全技術 椎名 和仁 46

今、チェルノブイリは

チェルノブイリ原子力発電所周辺視察報告 (1) 千葉 百子 56

Column

労働科学研究所の役割と未来

創立100周年に当たって 濱野 潤 40

日本産業保健法学会

法の知見を基礎に産業保健現場の諸問題に対峙 梶原 隆芳 51

Talk to Talk

ゆれ動く 肝付 邦憲 54

Information..... 63

次号予定・編集雑記 64

時代を拓く新たな一歩を

和久井 康明

労働科学研究所が、本年百周年を迎えた。誠に喜ばしいことである。百年前に遡ると、1918年に始まったスペイン風邪の大流行がようやく収まったものの、景気停滞が長引いている時代であった。これまでの百年も労働の量と質の変化は著しいが、これからの百年を考えると、想像を絶する変化が訪れることは間違いない。

労働科学の研究領域は、これまで以上に拡がらざるを得ないであろう。現代は、人間の生活が、大きく、激しく変化を遂げつつある時代である。労働とそれ以外の生活とが、双方ともに多様に変化し、ワークライフバランスが、随所で課題とされているが、その適正化はまだまだ道遠し、と言わざるを得ない。人間工学を始め、生理学、脳神経科学、心理学、社会学等を駆使した学際的な研究が要請されている。

こうした状況の中で、労働だけを抽出して、研究テーマとすることは無意味である。今の労働が単独でできることには限りがあり、加えて協働、即ちコラボレーションにも限りがある。それ故過度な期待や要望をすることは、ないものねだりとなる。ということは、研究テーマの絞り込みが必要である。幸い、労研には創立以来のすぐれた遺産がある。百年にわたる膨大な研究集積

が残されていることだ。アーカイブスとしてまとめる作業がほぼ終わっているが、これを今日的な観点から抽出し、現代にも当てはまる研究成果を簡略な形で「見える化」する必要がある。そうした研究集積の中から、現代の労働にも共通し当てはまる成果を取り出し、その延長上に研究テーマを決めることが、今後の労研の発展にとって第一着事項であると思う。

労研には、そうした有形の遺産のほかに、無形の遺産が二つある。一つは、諸先輩が残した、研究調査における「現場主義」である。労働の実態は、現場でしか正しく把握できない。20世紀初頭にテラーにより提唱された「科学的管理法」も、その裏付けとなったものは、現場におけるモーションスタディであり、タイムスタディであった。粉塵が舞い上がる、倉敷の紡績工場の現場で、疲労のために居眠りを余儀なくされている若年の女性労働者を、大原孫三郎と暉峻義等が目の当たりにして、労研の創立を決めた時、労研の原点である「現場主義」が生まれたのだといえよう。

もう一つは、労研に在籍された多くの研究員の方々が、離任されても客員研究員や特別研究員として、何らかのつながりを労研に持ち続けていることである。これは、暉峻義等初代所長や設立に貢献



わくい やすあき
株式会社クラレ 顧問
大原記念労働科学研究所 理事

した桐原葆見らが、築いた人間味あふれる、ゲマインシャフト的な組織風土が、労研にはあることを意味している。

コロナ禍の収束までこれからどのくらいの年月がかかるのかわからないが、ポストコロナにおいては、労働も、家庭生活も、社会も、大きく変貌することは間違いないであろう。今新常态と呼ばれる変化の兆しが、果たしてどのような問題を我々に投げかけるのか。ポストコロナは、決して元の状態には戻らないということだけは確かであろう。

こうしてこれからの百年が労研にとつて、どのような試練をもたらすかは、誰も分らないが、上述した三つの遺産、即ち、先人の研究業績、研究方法論としての現場主義、ヒューマニティに溢れる組織風土、という伝統に自信を持って、来るべき二百周年に向けて歩き始めてもらいたいと切に望んでいる。